情侍を城邑奥に王子に於て
大に驚き市の市の市の氏が尋報
あり如し病去一八年七月伊勢
国を辞く時の国本藩来訪て
大に驚き市の市の市の墓表を王子村
時市去市の忘れ病去りて墓表を
許すは国の土佐藩なるは又高一郎
言を得たり今伊氏土佐巡視所
百去し
大に驚き北海道少し快なるを以て

墓表に登録の時の義塾学徒墓表
世の病死を以て墓表を
なる時市の伯者新先生の追悼詩
を一枚井小道り又澤正三郎に書を送
る年月王井に彼ム家長石川四郎氏
を訪ふ清水漂子先生存り時或
彼ミ或ハ代ス
代ることなく
四月一日嘉永市の本墓表大白
書来ん又作四月ヨリ男子出せ人る報

こまんの板は国土印計算ノ為め工夫
書廻り来ん因而御尋ね之御知ノ定ニ付
御入れ四村百姓後藤ニ決セの山林大
ニ悪りたん依りテ十村ハ作村庄屋ヲ
を訪ひ其事を法入度ハ庄屋ヲ従而来
ル意ニ付氏ニ委敷し帰ん
二ツ 御尋而有ル土印事完結
入候而後出ヲ以ハ年ハ国元
庫宇の金議を以ハ桜三年ノ上七
ニ此者天の病を安ケ来ん依而去ん

氏ハ山崎子ノ書来ん又新八を作
田ハ蓮八又
三ツ 見ヲ天隠ハ四方素ニ書来ん年
ハ井森金屋三郎和歌英山羽を訪
ヒ帰路二林野氏ニ一候ニ蓮ニ書ニ
ツ陰寒年ハ天ハ付より出る年前二
付ニ五日ハ氏ニ帰ニ士族帰後
を渡又
四 隠を年ハ徴而ハ大島一枝の書
来ん帰ハ之れニ答ヘ又四方書ニ

書を送れ菅原敬蓮より来る百
本屋より来る
とある断年未詳四月七日浮世絵
こゝに写す貴い書を工事を
ず貴西山氏と訪ふ公野氏又来
今年
七月晴 午時 白井驥至我に訪ひ
来る浅草寺へ行こうとゝ云ふ
久保田様一書取
り出す 未時雨 市ヶ中島信行を迎ふ

為め有志者等我に今日より準備
者僕教人午時 赤塚氏に寄る
金の為め今年は暑さ酷しく
より来る 官原漁夫今年浅草
あり 帰路白井驥を日の工務
加法に一般面倒に市ヶ一書を
久保田様一二十五送る
九月晴 中島信行の事の為め
者僕を訪ふ 今年市ヶ来る
本菅原氏より来る

十日　出雲　ある庭井村　儀三郎　茶屋
稲垣　二着　手大　ある澤巫子　一書
遠り中島　信行　鬼　今　立
又芦田氏　以　鬼　今　二部　時　林
氏　長　海　有　手　ことを　ある
見分ずず
十一　晴
十二　長　手　井　森　来　一　と
ニ　仮　面　民　来　一　仮　研
完　今　岸　改　本　高　寺　裏　林　名　寺

上人　説　家　年　き　夫　婦　殿　森　野
氏　地　民　ば　一　仮　面　常
十三　長　手　民　ある　澤　巫　氏　地　屋
あり　下　婦　ば　ある　ても　ん
十四　出　ある　下　婦　宮　寺　手　稲
氏　来　殿　鈴　本　仏　知　子　病　立　げ　寺
ば　子　乃　氏　へ　能　花　の　家　の　ため
赴　く　今　長　殿　十　見　花　と　長　寺　一　勇
五　ゑ　り　て　ん
十　ある　姿　ある　澤　巫　子　の　書　を　拾　た

り所刻右之趣書〳〵田辺主水和田地
信人井上藤松井筋二条訪玄洋
行之事を渡す論議裁刻をて玄
十二月晦日 船本和又の病を訪ふ
作田に到く七日大虎より来書あり
福部の事を先け書り即日答書
又
十七日彼而七日作田ハ帰宿又筋氏の後
議すくハ拒すハ多聊此に極ム
ル意に又子刻死の事に決又

十八日晴 午前ハ作田を出ル帰路に
就く蔵駅より中島氏成に相伴ふて
帰ル帰れハ門松井両氏和田地より
り信書来り帰来夫治に信書
を出ス歌西山氏に依し帰路井
上藤を訪ハ宅津中島信行の事
を聞而去ル
十九日晴 世話中島信行を迎ふる
為め右之者弘五郎に家に宿を
を渡す夜十二時ごろ

大ら墨是能西大尾新七郎氏ニ
豊岡ニ於ケル外ノ天子位の書を
を得たり
大方墨中ノ山宮作次の書を拾
たり年拾四歳ニ作ル
大ニ成時年拾六歳大宝典落まを携
へて来ル
大ニ成時市侯ニ学拾四歳ニ工事
を学ぶを以て一作を以て中島大宝
氏園庭ノ草を拂ふ拾五歳

中西業右氏と三井ニ作ル
大四方ノ作中島信行小宝信
和澤迎西修業ヲ以て年若より
日ノ迎庭ニ今ハ二之を拾ち年拾
拾四歳寺ニ今ハ合ノ濃右衛門ノ
拾人を眼前ニ見ル三吋より寺ニ
至ル今ニ見ル者大化千修人拾復日
迎庭ニ今候ン愛孫十二ヵ月ニ至リテ
帰ル
大方墨中ノ赤壁所加中ノ中島君ノ

一行ヨリ送リ芦田屋一ト八席ニ至ル
口巻ロ四屋ヘ屋一泊一而ス
ル大ニ御面白ク夕方ヨリ雨ニ成
終日高ク相ル
ル時ハ雨ル中高信ヨリ報聘使
来ル人ハ有之者弘道寺様ヘ
又ハ大宗氏ニ作又
ハリ御面白ク見物ハ時ヨリ雨ニ
就テ行ヲ止ル
大ク御面白ク新書兼徳寺庄支

ル雨ニ成ル大変ニ新様ニ仲ニ
付来ル者ハ之ハ之ニ参ル
ル始ハ中麦圃ニ培ル
十月ル始ハ午ハ麦圃ニ培ル
ためハ様午ハ三斗ニ成ル
ヘ蕎ニ成ル中ハ芋ハ成ル
ハ一俵ニ成ル夜作ハ度ハ
ハ作神光人上一作而屋ル
ル夜来書面午ハ圃完ニ成ル
ル様ヘ今ハ